



## ✧ 研究会報告 ✧

第 14 回 外国人居留地研究会 2022 全国大会 in 長崎

# 外来と在来の角逐

日時：2022 年 11 月 19 日（土）・20 日（日）

場所：長崎大学片淵キャンパス

斎藤 多喜夫（横浜外国人居留地研究会）

## 1. 居留地研究会全国大会

幕末の通商条約によって外国貿易に開放された二都五港には外国人居留地や雑居地が設けられた。五港とは函館・新潟・横浜・神戸・長崎をいい、ここには開港場が設けられ、港と町が開放された。二都とは東京・大阪をいい、ここには開市場が設けられて、町のみ開放された。ただし、明治元年（1868 年）大阪は開港場に変更されたので、それ以降は一都六港になった。これら七都市は居留地や雑居地の存在によって、他の都市とは異なる発展を遂げる一方、七都市間には共通性もある。現在七都市にはそれぞれ居留地研究会があり、開港場・開市場に特有の歴史を研究するとともに、回り持ちで全国大会を開き、七都市間の共通性や相違性について議論している。令和 4 年（2022 年）の全国大会は 11 月 19 日と 20 日の二日間、長崎大学片淵キャンパスで開催された。共通テーマは「うつりかわる文化と生活様式～居留地、雑居地、そしてわが町～」であった。横浜からは私が「外来と在来の角逐」と題する報告を行った。

居留地・雑居地にやってきた欧米人には「郷に入っては郷に従え」というような考えはまったくなかった。故国と同じ生活をもち込んだのである。貿易商の増加とともに、彼らの生活を支える食料品や日用生活品を扱う商人、各種製造業者、医師・建築土木技師など専門家の来日も相つぎ、居留地はさながら西洋の小都市のようになった。居留地は西洋文化流入の窓口としての役割を果たすことになり、「もののはじめ」の諸事象が生まれる。しかし、もう一方で対抗的に日本文化の見直しも行われた。開港場・開市場における「うつりかわる文化と生活様式」についてはこの両面の考察が必要だと思う。

## 2. 和洋混淆の明治文化

### (1) キーワードは普遍的価値

私はこれまで「もののはじめ」について調査し、『幕末・明治の横浜 西洋文化事始め』（明石書店、2017 年）および『横浜もののはじめ物語』（有隣新書、2017 年）という本にまとめた。それらを通観すると、「西洋文化の受容」と言っても、さまざまなパターンが

あったことに気づく。石鹼やマッチのように、日本になかったもの、あるいはより便利なものは在来のものを駆逐して受け入れられた。パンやビールのように米や酒と共存したものもある。牛鍋のように新しい食材である牛肉が在来の料理法である鍋料理と習合した例もある。西洋演劇のように受け入れられなかったものもある。

西洋文化は選択的に受容されたのだが、選択の基準は何だったのだろうか。キーワードは「普遍的価値」だと思う。卑近な例を挙げれば、牛乳や食肉、ビールなど西洋の飲食物品を推奨するときにはたいてい「滋養強壮」が強調された。けっして西洋的なものがゆえに価値ありとされたのではない。しかし同時にその普遍的価値が西洋的なものを通して、あるいは西洋的なものを参照することによって意識された点に「文明開化」の特徴がある。また普遍的価値の認識には時間の経過が必要であり、西洋文化がもつ普遍的価値の発見の過程は同時に日本文化の見直しの過程でもあった。こうして両者のもつ普遍的価値の折衷、すなわち「採長補短」が行われ、その帰結として「和洋混淆」の明治文化が生まれる。

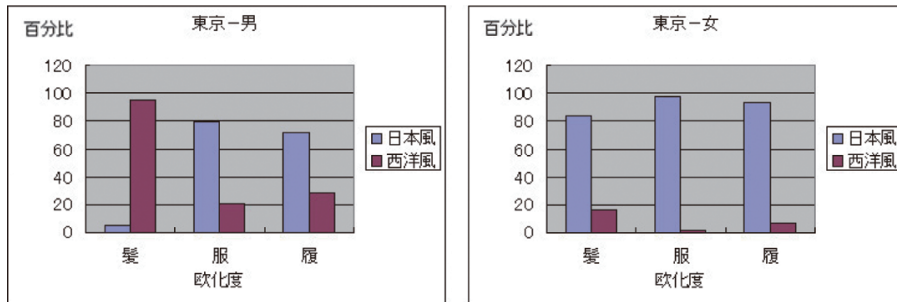
### (2) 頭髮

ここでも卑近な例として洋装（洋髪と洋服）を取り上げる。明治 4 年（1871 年）の断髪令に際しては、髻を結うのは「野蠻の頭様」であり、「海外の嗤笑」を招くというようなことが言われた。髻を「アンシャン・レジム」（旧制度）の象徴と見なすに当たって、「海外」の目が意識されていたことがわかる。文面だけではわからないのだが、断髪令は男性のみを対象としたものだった。ところが「ジャンギリ頭をたたいてみれば文明開化の音がする」という里謡に誘われたのか、勘違いして髻を切る女性が現れた。あわてた為政者たちは、翌年の東京府を皮切りに、女性の断髪禁止令を公布した。女性は「髪を長くし飾りをもちゆるこそ万国の通俗」だという。ここでは西洋的なものを通り越して、いきなり「万国の通俗」、つまり普遍的価値が参照されている。

髪は切ってもまた生えてくる。そうするとまた髻を結ってしまう人もいた。坪井正五郎が明治 20 年に発表し

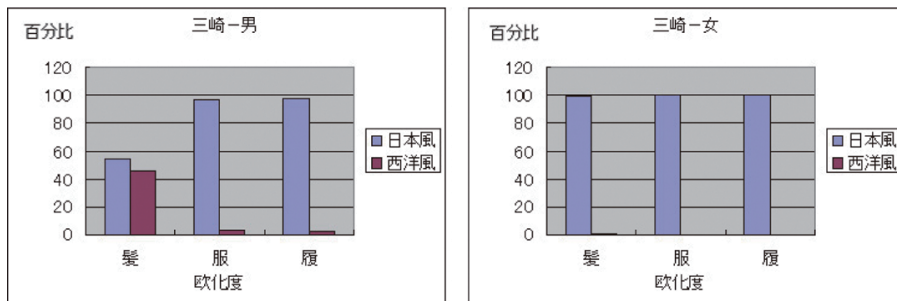
風俗欧化度調査（明治 20 年）

(1) 東京中三ヶ所一甲：本郷追分から板橋迄、乙：飛鳥山から道灌山を経て上野迄、丙：半蔵門から日比谷門迄—明治 20 年 4 月、山崎直方調査



\* 女性の髪の西洋風とは束髪のこと

(2) 三崎—明治 20 年 7 月、坪井正五郎調査



【典拠】坪井正五郎「東京中三ヶ所及び相模三崎にて行ひたる風俗測定」（『東京人類学会雑誌』18号〈明治20年8月〉、『東京市史稿・市街篇』第70所収）

た調査記録「東京中三ヶ所及び相模三崎にて行ひたる風俗測定」（『東京人類学会雑誌』18号〈明治20年8月〉、『東京市史稿・市街篇』第70所収）によると、東京では男性はほとんど散髪だが、女性の多くは髷を結っていた。女性の髪の西洋風とは束髪、すなわち髷を結っていないのに結っているように見える髪形のことである。三崎では男性でも髷を結っている人が多く、女性はほとんど結っていた。漁師は海が荒れると髷を切って投げ入れ、鎮まるのを祈る風習があるので、男性の髷の比率は漁港特有かもしれない。

### (3) 服装

服装については東京・三崎ともに和服が多かった。横浜の例でいうと、明治10年代後半、一時洋服が流行ったが、20年代になると反動が起きた。明治24年2月8日付『横浜貿易新聞』は「洋服商の内状」と題し、「漸く模倣熱醒めて旧物主義の復古となり、羽織袴こそ優にやさしけれと加担する人の増加せしより洋服の需要復前日の如くならず」と報じている。

明治30年、横浜の都心で観察した結果が「横浜雑聞 横浜市の遊樂地」として『横浜商業会議所月報』4号（明治30年1月29日）に載っている。それによると繁華街に位置する吉田橋の5分間往復通行人計483人中、洋服1分、和服9分であった。観察者は「開港場の割合に洋装者少なきは横浜の一大奇現象なり」と述べ

ている。この場合、観察者は「開港場には洋装者が多いはずだ」という前提に立っているのだが、はたしてそうだろうか。

開港場の魅力の一つは外国文化が日本人に対してもつエキゾティシズムだが、外国人に対して日本的なものをもつエキゾティシズムもあった。外国人と接する機会が多く、日常的に日本人としてのアイデンティティを求められ、また美術工芸品が重要な輸出品であった横浜では、日本の伝統文化に対する感覚が鋭敏だった。西洋文化摂取の窓口であった横浜は、同時に日本趣味の豊かな町でもあった。中国人を含めてさまざまな民族が固有の文化を失うことなく共存していた都市、それこそが開港場に特有の国際文化都市であろう。

男性の洋装の特徴は活動的な点にあり、靴やズボンは早くも幕末から軍隊に導入され、明治に入ると警察などにも採用された。しかし、帽子が取り入れられた以外一般には普及しなかった。他方、女性の場合、当時の洋装はパッスル・スタイルと呼ばれるもので、胸元を上げ、腰を締め付け、スカートを鳥籠のように膨らませるものであった。いわゆる鹿鳴館スタイルである。明治20年6月30日、横浜居留地で発行されていた英語の新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』紙に、アメリカの一女性が、大統領夫人以下の賛同署名を得て投書を寄せている。「胸元をひろげ腰を締めつける洋装は道徳的にも健康的でもないから、日本女性が模倣するのはやめる



ように」というのである。忠告されるまでもなく、洋装は女性のあいだでは、ほとんどまったく普及しなかった。

女性が西洋の服飾をまったく取り入れなかったかという、そうでもない。束髪についてはすでに触れた。女学生の袴もズボンの影響を受けているかもしれない。こうして西洋的なものを選択的に受容した結果、束髪に袴と靴を履く、あの独特の女学生スタイルが生まれた。これは一つの例にすぎないが、このような和洋混淆の文化や風俗こそが、文明開化の帰結としての明治時代の文化だった。



明治時代の女学生スタイル 尾竹国観画「時好（はやり）双六」より。『時好』4巻1号付録。1906（明治39）年1月刊。横浜開港資料館所蔵

### 3. 西洋通の国粹主義者

普遍的価値がほんとうに普遍的ならば、それは西洋の文化のみならず、日本の在来の文化の中にも存在するはずであろう。こうして、西洋の文化を参照しつつ、日本の伝統文化の中に普遍的価値を見いだす努力も行われた。それが自国の文化の中に普遍的価値＝粹（エッセンス）を探る国粹主義と呼ばれる思潮であった。それは本来けっして偏狭な民族主義を動機とするものではなかった。

在来の文化の価値も西洋的なものを参照することによって認識された結果、在来のままではなく「改良」が必要だと考えられた。日本画家も洋画から多くのことを学ばなければ世界に通用しなかったのである。江戸時代の代表的な文化である浮世絵や歌舞伎も「改良」によって新時代に適応した。「改良」も明治時代を理解するキーワードの一つである。

#### (1) 改良演劇

横浜居留地には幕末以来西洋劇場が造られ、西洋演劇が上演された。それに注目した日本人は一部の知識人だけで、庶民は見向きもしなかった。歌舞伎で用が足りたからである。横浜では伝統的な歌舞伎も「改良演劇」も、「横浜新派」と呼ばれる新演劇も、いずれも盛んだった<sup>(注1)</sup>。劇評に健筆を揮い、「改良演劇」の後押しをした富田砂燕や歌舞伎の脚本を書いた佐波錦川はいずれも外国商社に勤めており、日常的に西洋文化と接する人たちだった。多様な文化が共存する横浜で、彼らが自国の文

化に目覚めたのは不思議なことではない。

演劇史家の松本伸子は『明治前期演劇論史』（演劇出版社、1974年）の中で、富田砂燕らの人々について、「西洋色の濃い横浜に住んで日本人という意識をいや応なしに持ってしまった人々の自国の伝統文化に対する本能的な守勢」を見ている。「西洋色が濃いにもかかわらず」ではなく、「西洋色が濃いからこそ」の守勢だというのである。西洋文化との出会いが日本の固有文化の見直しを促した例だと言える。

#### (2) 近代数寄者の誕生

日本画の復興を目指し、英語で『茶の本』を著した岡倉天心は横浜出身であり、三溪園という和風庭園を築くとともに日本画家を育て、益田孝<sup>（鈍翁）</sup>（〔 〕内は数寄者としての雅号）とともに大師会という茶会を始めた原富太郎<sup>（三溪）</sup>は横浜を代表する生糸輸出商だった。横浜発祥の三井物産や日本郵船横浜支店では「財界茶道」が盛んであり、益田孝など近代数寄者と呼ばれる茶人を輩出した。その先鞭をつけたのは益田孝の弟で東京海上保険の創立者、克徳<sup>（非黙）</sup>だった。ついで克徳の勧めで孝が、さらに克徳や孝の勧めで馬越恭平<sup>（化生）</sup>（三井物産横浜支店長）や朝吹英二<sup>（柴庵）</sup>（貿易商会取締役）が茶の湯に打ち込むようになる。日本郵船の初代社長森岡昌純や三代社長近藤廉平<sup>（恬斎）</sup>、副社長加藤正義<sup>（欽堂）</sup>も茶の湯を嗜んだ。横浜正金銀行の初代頭取中村道太は、実業家としては失敗したが、その後の人生を茶道の師匠として過ごした。彼らはいずれも商権回復（外国商社から貿易の実権を奪おうとする運動）の最前線に立つ人々でもあった<sup>(注2)</sup>。

益田孝に古美術収集の楽しさを教えたのは、意外にも鹿鳴館外交の立役者として欧化主義の権化のように見なされる井上馨だった。明治10年代半ばに起きた三つの出来事、鹿鳴館外交と商権回復と近代数寄者の誕生という一見無関係に見える三者は、政治・経済・文化のそれぞれの分野で、対外的な自立・平等を目指すという点で共通の目標をもっていた。

#### (3) 洋行帰りの保守主義者

「西洋通の国粹主義者」のメンタリティを体現した人に雨森信成<sup>（あめのもりのぶしげ）</sup>がいる。ラフカディオ・ハーン<sup>（ラフカディオ・ハーン）</sup>の協力者として知られ、ハーンが「ある保守主義者」という小編のモデルとした人物である<sup>(注3)</sup>。福井藩士の家に生まれ、藩校明新館でW.E. グリフィスの感化を受けた。廃藩置県後、横浜でS.R. ブラウン牧師に師事、その後東京一致神学校に進んで牧師への道を目指すか途中で断念、事業に失敗したのち、朝鮮・中国からさらに欧米への旅に出してしまう。

明治21年頃、雨森は再び横浜に姿を現し、グラント・ホテル内のクリーニング業など、外国人を顧客とする仕事をしながら、『明治会叢誌』という保守主義の雑



誌を編集していた。この「埋もれた市井の思想家」（平川祐弘『破られた友情』（新潮社、1987年）での表現）の一つの顔がハーンの協力者であった。日本語の読めないハーンのために、日本の文化をレクチャーしていたのである。その実力を遺憾なく発揮したのは、東京や横浜・鎌倉に関するすばらしい英文のガイドブック *Guide book for Yokohama and Immediate vicinity* の著述であった。国粋主義の論客としての顔ももっていた。イギリスの一流雑誌『大西洋評論』（*Atlantic Monthly*）に寄稿した論文『Japanese Spirits』（「大和魂」とでも訳すべきか）で本領が発揮されている。

雨森は『明治会叢誌』の発行母体である明治会について「大和魂を守る一方、西洋思想を吸収する、つまり西洋文明をもって日本文明を強化する協会」と言っている<sup>(註4)</sup>。一般に明治10年代の欧化主義の反動として20年代に国粋主義が起きたとして、両者を対立するものと考えられてきた。しかし横浜では両者はまったく対立するものではなかった。「洋行帰りの保守主義者」あるいは「西洋通の国粋主義者」といった横浜に特有のメンタリティを最初に体現した人物が岡倉天心だとすれば、富田砂燕や雨森信成もその系譜に属する人だったと言える。

居留地という西洋文化摂取の窓口として語られることが多い。しかし、もう一方で在来の文化を覚醒させ、西洋文化を吸収しつつ、世界で通用する日本文化を生み出そうとする動きがあったことにも、もっと注目してほしいと思う。

【注】

- (1) 横浜の演劇に関しては、斎藤多喜夫「横浜の劇場」（『横浜の芝居と劇場—幕末・明治・大正』（横浜開港資料館、1992年）所収）参照。
- (2) 横浜の近代数寄者については、斎藤多喜夫「益田孝」（『横浜』30号〈横浜市民局広報課／神奈川新聞社、2010年10月〉所収）参照。
- (3) 雨森信成については、山下英一「グリフィスと福井」（福井県郷土誌懇談会、1979年）参照。
- (4) 山下英一「『心』の保守主義者 雨森信成」（『英学史研究』19号〈日本英学史学会、1986年〉所収）

## 外国人居留地研究会全国大会に参加して

大里 浩秋

（非文字資料研究センター 客員研究員）

昨（2022）年11月19、20日、長崎大学片淵キャンパスで開かれた第14回外国人居留地研究会全国大会に、非文字資料研究センターの租界班から内田青蔵、姜明采、大里浩秋が参加した。租界班では、戦前中国や朝鮮に設けた日本租界や居留地に関する調査・研究を長年続けてきたが、黒船来航で開港して以来日本に来て貿易その他の仕事で滞在した外国人の状況などについても併せて学ぶべく、遅れて横浜外国人居留地研究会の活動にも参加して今に至っている（横浜を含む日本各地の外国

人居留地研究会とその全国大会については、拙文の直前に置かれた斎藤多喜夫氏の報告を参照していただきたい）。

さて、上述の長崎の大会は「うつりかわる文化と生活様式—居留地、雑居地、そしてわが町」を共通テーマにして、函館、新潟、築地、横浜、大阪川口、神戸、長崎の代表から各地の現状や抱える研究課題などについて興味深い報告を聞いたが、私としては、長崎総合科学大学特任教授でグラバー園名誉園長のブライアン・パークガフニ氏による基調講演「うつりかわる長崎居留地—居留民の子孫が見た交流の軌跡」がとても印象に残ったので、簡単ながら紹介したいと思う。

ブライアン・パークガフニ氏は、近年ミッションスクールや領事館、国際墓地、洋風建築などの研究が進んで、旧長崎居留地の歴史は次第に明らかになってきたとし、その中で最も重要な情報源のひとつは海外に住む元居留民の子孫から得られた写真、手記、日記などであると述べるとともに、複数の子孫との交流の実例を紹介した。例えば、子孫の一人、1940年に3歳で日本を離れた女性は15年ほど前にグラバー邸を訪ねてきて、長崎で過ごしたことにずっと後ろめたい気持ちを抱いてきたと吐露したと紹介し、その後多くの写真や資料を寄贈してくれたと語った時には、私は心を動かされることになったのである。明治時代に渡ってきた西洋人の多くは特権的な身分保証を得て住みついたはずで、その後も日本敗戦後までそこに住んでから去った彼らの境遇について、その子孫が感じてきた思いが伝わったからである。今回の大会の前日、私たちは長崎に着いてさっそく大浦天主堂を見学した足で高台にあるグラバー邸に行き、以前行った時には一通り部屋をながめただけで他の場所の見学に移ったのに、今回は建築史専門の内田さんのていねいな説明を聞きながら、その建物に人が住み活動していた時の彼らの息遣いを少しでも感じられたらと思い、ゆっくりと見て回った。そして、そうした高台の洋館で感じたことと大会での基調報告を聞いて感じたことが不思議に結びついて、今回の長崎での収穫のひとつになった。

ところで、拙文の前に置かれた斎藤氏の文は、今回の大会で横浜外国人居留地研究会を代表して報告された内容を本誌にも載せてはいかがかと提案したことへのお返事である。補充を加えて一層含蓄ある内容になった報告を読ませていただけたことに感謝します。